

科目番号 3701	授業科目名： <b>文化理論</b>	旧科目名：	単位数 2単位
開講期 後木 2	英文名： Culture Theory	担当教員名： 海老根 剛 准教授	標準 履修年次 2・3年

●**科目の主題**

表現文化コースで学ぶ学生を対象に、文化の考察に不可欠な基本的視点と理論を概説します。表現文化コースは本質的に学際的であり、そこで扱われる対象も多様です。したがって、個別的な主題の多様性のなかにコースの全体像が見失われてしまいがちです。この講義では、表現文化コースが前提する「文化」についての基本的な考え方をいくつかの観点から解説します。

●**到達目標**

文化の概念の歴史的変容を確認し、文化を考える基本的視点を獲得する。

●**授業内容・授業計画**

今回の講義では、まず文化という次元の人類学的起源を確認し、近代社会と、後期近代とも呼ばれる現代社会における文化のありようを、それを対象とする代表的理論とともに解説します。さらに授業の後半では、特に創作に関わる諸理論を参照して、創造行為の意味合いが19世紀から現在までどのように変化してきたのかを考察する予定。

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 文化という次元(1)
- 第3回 文化という次元(2)
- 第4回 文化という次元(3)
- 第5回 近代社会と文化(1)
- 第6回 近代社会と文化(2)
- 第7回 近代社会と文化(3)
- 第8回 グローバル化と文化(1)
- 第9回 グローバル化と文化(2)
- 第10回 グローバル化と文化(3)
- 第11回 創作行為をめぐって(1)
- 第12回 創作行為をめぐって(2)
- 第13回 創作行為をめぐって(3)
- 第14回 創作行為をめぐって(4)
- 第15回 まとめ

●**評価方法**

授業期間中に課す複数回のレポートによる。また、レポートの代わりに発表の機会を与えることもあり得る。

●**受講生へのコメント**

表現文化コース二回生は必ず受講すること。

教室の関係上、履修希望者多数の場合には、表現文化コースの学生を優先したうえで受講制限を行うことがある。

●**参考文献・教材**

文献などは随時紹介する。

科目番号 3722	授業科目名： <b>表現文化論</b>	旧科目名： 表象文化論 I	単位数 2単位
開講期 前木 3	英文名： Lecture in Art and Representation	担当教員名： 三上 雅子 教授	標準 履修年次 2～4年

●**科目の主題**

現代演劇のなかで重要な位置を占め、日本においても多くの上演を見ている演劇ジャンル「ミュージカル」を取りあげる。今日われわれが知るミュージカルは、19世紀アメリカにおいてヨーロッパ発祥の音楽劇・新大陸における黒人音楽などが融合して成立していった演劇形態だが、現在ではアメリカやイギリス等の英語圏のみならず、ヨーロッパ大陸ならびに日本をはじめとするアジア諸国においても、英米ミュージカルの翻訳上演にとどまらず、それぞれの文化圏固有のオリジナル作品が生み出されている。

現代演劇としてのミュージカルの特質を考察するとともに、グローバル化の時代における異文化受容・文化融合の視点からも分析を行う。

### ●到達目標

現代演劇に関する知見を獲得するとともに、現代の文化現象を考えるうえで不可欠の要素である異文化受容・文化的融合についての認識を深める。

### ●授業内容・授業計画

ミュージカルの歴史について概説的に講じたのちに、各文化圏・言語圏におけるミュージカル創造の特性について講じる。

- 第1回 イントロダクション。
- 第2回 ミュージカルの歴史(1)
- 第3回 ミュージカルの歴史(2)
- 第4回 ミュージカルの歴史(3)
- 第5回 アメリカにおけるミュージカル(1)
- 第6回 アメリカにおけるミュージカル(2)
- 第7回 アメリカにおけるミュージカル(3)
- 第8回 イギリスにおけるミュージカル(1)
- 第9回 イギリスにおけるミュージカル(2)
- 第10回 ミュージカル映画(1)
- 第11回 ミュージカル映画(2)
- 第12回 日本におけるミュージカル(1)
- 第13回 日本におけるミュージカル(2)
- 第14回 アジア圏におけるミュージカルーグローバル化
- 第15回 レポート作成にあたっての注意、全体総括。

### ●評価方法

レポート75%、平常点(毎回授業後のコメント等)25パーセント。

### ●受講生へのコメント

実際に上演されているミュージカルを劇場で鑑賞する、あるいはミュージカル映画・上演ミュージカルの映像化等のDVDを見るなど、積極的に多くのミュージカルに触れておいてほしい。

### ●参考文献・教材

授業中に適宜指示する。

科目番号 3723	授業科目名: 表象文化論	旧科目名: 表象文化論Ⅱ	単位数 2単位	
開講期 後集中	英文名: Lecture in Culture and Representation	担当教員名: 海老根 剛 准教授	標準 履修年次 2・3年	

### ●科目の主題

本講義のねらいは、映像作品の考察や分析のため基礎作りです。対象としては主に映画作品をとりあげることになりますが、ビデオやテレビなどの分析にも不可欠な映像リテラシーの習得にも役立つはずです。表現文化コースの学生で、映像表現を卒論のテーマにしたいと考えている者は必ず履修すること。

### ●到達目標

この講義ではみなさんにまず多くの作品に触れてもらい、映像作品を考察するための言葉を獲得してもらうことが目標です。したがって、受講者の積極的な参加が求められます。なお第一回の授業の前に見ておいてもらう映画作品を掲示で伝えますので、受講希望者はかならず掲示をチェックするように。

### ●授業内容・授業計画

具体的な授業形態としては、毎回、いくつかの作品から特定の場面を選んで上映し、その場面の特徴やそこで用いられている技法を考察しながら、映画の多様な側面に光を当てていきます。また、それらの考察を通して、映画の分析に不可欠な基礎概念の導入も行います。以下の授業予定は暫定的なものであり、実際の順序やテーマは変更されることがある。

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 運動(1)
- 第3回 運動(2)
- 第4回 運動(3)
- 第5回 空間(1)

- 第 6 回 空間(2)
- 第 7 回 空間(3)
- 第 8 回 時間(1)
- 第 9 回 時間(2)
- 第 10 回 時間(3)
- 第 11 回 演出
- 第 12 回 古典映画と現代映画
- 第 13 回 現代映画の諸相(1)
- 第 14 回 現代映画の諸相(2)
- 第 15 回 現代映画の諸相(3)

●**評価方法**

集中講義の授業中に映画作品の分析を3回行ってもらう。この3回の小レポートで評価する。

●**受講生へのコメント**

使用教室の制限上、受講希望者多数の場合には履修制限を行うことがある。その際には、表現文化コースの学生を優先したうえで、残りについて抽選を行う。

●**参考文献・教材**

プリント配布。

科目番号 3724	授業科目名: <b>比較表現論</b>	旧科目名: 比較表現論 I	単位数 2 単位	
開講期 前月 2	英文名: Lecture in Comparative Representation	担当教員名: 高島 葉子 准教授	標準 履修年次 2～4 年	

●**科目の主題**

民話に関する概説と民話研究の理論、方法について講義する。

●**到達目標**

話型やモチーフなどの民話の基本事項および民話の国際性、地域性について学ぶとともに、民話研究のための理論と方法の知識を得ることを目標とする。

●**授業内容・授業計画**

以下のような構成で講義する予定である。

- 第 1 回 導入:民話とは何か。
- 第 2 回 民話の特徴
- 第 3 回 民話の国際話型(1)
- 第 4 回 民話の国際話型(2)
- 第 5 回 民話の国際話型(3)
- 第 6 回 民話の地域性(1)
- 第 7 回 民話の地域性(2)
- 第 8 回 インド・ヨーロッパ起源説・神話学派
- 第 9 回 民族誌学派理論
- 第 10 回 フィンランド学派理論
- 第 11 回 形態学(構造論)的分析(1)プロップのモデル
- 第 12 回 形態学(構造論)的分析(2)ダンダスのモデル、ブレモンモデル
- 第 13 回 精神分析的解釈:フロイト派とユング派
- 第 14 回 歴史、社会学的アプローチ
- 第 15 回 まとめ

●**評価方法**

平常点 30%、期末試験 70%で評価する。

●**受講生へのコメント**

あらかじめ少なくとも日本民話(昔話)の代表的なものの内容を確認しておいて下さい。

●**参考文献・教材**

授業中にプリントで資料を配布する。参考文献は適宜指示する。

科目番号 3725a	授業科目名: <b>文化理論基礎演習 a</b>	旧科目名: 表現文化基礎演習 I a	単位数 2 単位	
---------------	-----------------------------	-----------------------	-------------	--

開講期 前月 3	英文名:	担当教員名: 野末 紀之 教授	標準 履修年次 2 年
-------------	------	--------------------	-------------------

● **科目の主題**

文学や芸術だけではなく、写真・広告・ファッションなどを読解するさいの基本的な視点を身につける。

● **到達目標**

上記の視点を応用しレポートを作成することを通じて、他人を説得でき、かつ自分で何らかの発見をしたと認識すること。

● **授業内容・授業計画**

いくつかの基本テキスト(英語および日本語)を演習形式で読みすすめる。

- 第 1 回 イントロダクション
- 第 2 回 テキスト①Chapter1 前半
- 第 3 回 テキスト①Chapter1 後半
- 第 4 回 テキスト①Chapter2 前半
- 第 5 回 テキスト①Chapter2 後半
- 第 6 回 テキスト①Chapter3 前半
- 第 7 回 テキスト①Chapter3 後半
- 第 8 回 テキスト①Chapter4
- 第 9 回 テキスト①Chapter5
- 第 10 回 テキスト②Chapter1&2
- 第 11 回 テキスト②Chapter3&4
- 第 12 回 テキスト③Chapter1&2
- 第 13 回 テキスト③Chapter3&4
- 第 14 回 まとめ
- 第 15 回 試験

● **評価方法**

出席、発表、試験を総合的に判断する。

● **受講生へのコメント**

授業への積極的な参加と十分な予習が必要。

● **参考文献・教材**

プリント配布。参考文献は適宜授業中に指示する。

科目番号 3725b	授業科目名: <b>文化理論基礎演習 b</b>	旧科目名: 表現文化基礎演習 I b	単位数 2 単位
開講期 前月 2	英文名: Basic Seminar in Culture Theory	担当教員名: 高島 葉子 准教授	標準 履修年次 2 年

● **科目の主題**

表現文化コースでは、文学や美術などの芸術作品だけでなく、テレビ、映画、雑誌、マンガなど日常的に接する身近な「ポピュラー文化」をも研究対象とする。こうした対象を研究するための理論、方法論の基礎を学ぶ。

● **到達目標**

理論的文献の輪読を通して、まとまった論考の内容を的確に要約報告するスキルを習得するとともに、学んだ概念と方法を用いて、身近な文化現象について分析し、短いレポートにまとめることができるようにする。合わせて、英語文献の講読を通して専門書を読みこなす英語力の基礎を身につけることを目指す。

● **授業内容・授業計画**

毎回の授業の前半に、ポピュラー文化に関する理論的英語文献を講読し、後半に日本語の文献を担当者がレジュメを作成したうえで内容を報告する。学期末には各自で興味のある題材について分析、発表を行い、レポートにまとめる。

- 第 1 回 オリエンテーション
- 第 2 回 英語文献の講読と日本語文献の内容報告
- 第 3 回 英語文献の講読と日本語文献の内容報告
- 第 4 回 英語文献の講読と日本語文献の内容報告
- 第 5 回 英語文献の講読と日本語文献の内容報告
- 第 6 回 英語文献の講読と日本語文献の内容報告

- 第7回 英語文献の講読と日本語文献の内容報告
- 第8回 英語文献の講読と日本語文献の内容報告
- 第9回 英語文献の講読と日本語文献の内容報告
- 第10回 英語文献の講読と日本語文献の内容報告
- 第11回 英語文献の講読と日本語文献の内容報告
- 第12回 各自で選んだ題材についての分析発表
- 第13回 各自で選んだ題材についての分析発表
- 第14回 各自で選んだ題材についての分析発表
- 第15回 まとめ

●**評価方法**

平常点 50%、期末レポート 50%で評価する。

●**受講生へのコメント**

英語テキストは入門書であるが、十分な予習を必要とする。また、授業でのディスカッション等への積極的な参加を求める。なお、受講生は原則的に表現文化コース所属の学生に限る。

●**参考文献・教材**

日本語文献については未定。英語文献は John Storey, *Cultural Studies and the Study of Popular Culture* からの抜粋をプリント配布する。

科目番号 3726a	授業科目名: <b>表現・表象文化論基礎演習 a</b>	旧科目名: 表現文化基礎演習 II a	単位数 2 単位
開講期 後月 5	英文名:	担当教員名: 海老根 剛 教授	標準 履修年次 2 年

●**科目の主題**

作品分析の基礎を学ぶ。最初に特定の方法論や理論を学んだうえでそれを作品に適用するのではなく、そのような方法論・理論にもとづく分析の一手手前にとどまり、具体的な対象としてある作品と向き合い、それを構成している表現の特徴や構造に即して考察するレッスンを行う。作品は私たちの前に、ひとつの物質的なまとまりとして、たとえば書かれた言葉(小説、エッセイ)、描かれた線と記号(マンガ)、化学的・電子的に定着された光学的な像(写真)、俳優の身体と声(演劇)、明滅する映像の連なり(映画)として与えられている。この授業では、そのような物質的なまとまりとしての作品がどのように形作られており、どのような動き、出来事がそこに生起しているのかを明らかにし、それを言葉によって記述するレッスンを行う。また、文献調査、画像編集にもとづく簡潔なプレゼンテーションを作成し、発表を行うレッスンを実施する。

●**到達目標**

作品から感じたことを手がかりにして作品表現について考察し論理的な文章にまとめる基礎的スキルの習得をめざす。

●**授業内容・授業計画**

小説、エッセイ、写真、マンガ、演劇、映画について、それぞれの表現形式の基本的特徴を学び、作品分析を執筆する。また学期末には各自、選んだテーマで発表を行う。

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 小説分析(1)
- 第3回 小説分析(2)
- 第4回 エッセイ分析
- 第5回 写真分析
- 第6回 マンガ分析
- 第7回 演劇分析(1)
- 第8回 演劇分析(2)
- 第9回 映画分析(1)
- 第10回 映画分析(2)
- 第11回 発表の方法と技術(1)
- 第12回 発表の方法と技術(2)
- 第13回 口頭発表(1)
- 第14回 口頭発表(2)
- 第15回 まとめ

●**評価方法**

6回提出するレポートと口頭発表による。

●**受講生へのコメント**

この授業は表現文化コース2回生を対象とした授業です。表現文化コースの2回生は必ず履修すること。他コースの学生は受講できません。

●**参考文献・教材**

コピーを配布。

科目番号 3726b	授業科目名: <b>表現・表象文化論基礎演習 b</b>	旧科目名: 表現文化基礎演習 II b	単位数 2 単位	
開講期 後水 3	英文名:	担当教員名: 海老根 剛 教授	標準 履修年次 2 年	

●**科目の主題**

作品分析の基礎を学ぶ。最初に特定の方法論や理論を学んだうえでそれを作品に適用するのではなく、そのような方法論・理論にもとづく分析の一手手前にとどまり、具体的な対象としてある作品と向き合い、それを構成している表現の特徴や構造に即して考察するレッスンを行う。作品は私たちの前に、ひとつの物質的なまとまりとして、たとえば書かれた言葉(小説、エッセイ)、描かれた線と記号(マンガ)、化学的・電子的に定着された光学的な像(写真)、俳優の身体と声(演劇)、明滅する映像の連なり(映画)として与えられている。この授業では、そのような物質的なまとまりとしての作品がどのように形作られており、どのような動き、出来事がそこに生起しているのかを明らかにし、それを言葉によって記述するレッスンを行う。また、文献調査、画像編集にもとづく簡潔なプレゼンテーションを作成し、発表を行うレッスンを実施する。

●**到達目標**

作品から感じたことを手がかりにして作品表現について考察し論理的な文章にまとめる基礎的スキルの習得をめざす。

●**授業内容・授業計画**

小説、エッセイ、写真、マンガ、演劇、映画について、それぞれの表現形式の基本的特徴を学び、作品分析を執筆する。また学期末には各自、選んだテーマで発表を行う。

- 第 1 回 ガイダンス
- 第 2 回 小説分析(1)
- 第 3 回 小説分析(2)
- 第 4 回 エッセイ分析
- 第 5 回 写真分析
- 第 6 回 マンガ分析
- 第 7 回 演劇分析(1)
- 第 8 回 演劇分析(2)
- 第 9 回 映画分析(1)
- 第 10 回 映画分析(2)
- 第 11 回 発表の方法と技術(1)
- 第 12 回 発表の方法と技術(2)
- 第 13 回 口頭発表(1)
- 第 14 回 口頭発表(2)
- 第 15 回 まとめ

●**評価方法**

6 回提出するレポートと口頭発表による。

●**受講生へのコメント**

この授業は表現文化コース 2 回生を対象とした授業です。表現文化コースの 2 回生は必ず履修すること。他コースの学生は受講できません。

●**参考文献・教材**

コピーを配布。

科目番号 3727	授業科目名: <b>表現・表象文化論演習 I</b>	旧科目名: 表現文化演習 I	単位数 2 単位	
開講期 前火 3	英文名: Seminar in Culture and Representation I	担当教員名: 小田中 章浩 教授	標準 履修年次	

## ●科目の主題

記憶喪失とその表象

## ●到達目標

与えられた課題に関する理解を深めると共に、発表の場において他の受講者とディスカッションを繰り返すことによって、表現・表象文化論にアプローチするための能力を身につけることを目標とする。

## ●授業内容・授業計画

昨年度に引き続き、記憶喪失というテーマが文学、演劇、あるいは映画においてどのように表現(表象)されているかを受講者と共に考える。なぜなら記憶喪失(解離性健忘)が小説、演劇、映画の主題として用いられた場合、その実態がそのまま描き出されることはまずないからである。それは話の筋をおもしろくするために不要な部分を切り捨てて単純化され、あるいは誇張される。すなわち「表象としての記憶喪失」である。

この講義では、こうした観点から、まず教員が演劇および映画におけるいくつかの事例について、「表象としての記憶喪失」の描かれ方、あるいは PTSD(心的外傷後ストレス障害)としての解離性健忘の歴史的由来について説明する。その上で受講者にグループ単位で、現代の小説、映画、演劇、マンガ、さらにゲーム等における「表象としての記憶喪失」の事例について報告してもらい、その表象のあり方についてディスカッションを行う。

第1回 記憶喪失とその表象に関する概説(1)

第2回 記憶喪失とその表象に関する概説(2)

第3回 記憶喪失とその表象に関する概説(3)

第4回 グループ発表 1回目

第5回 グループ発表 2回目

第6回 グループ発表 3回目

第7回 グループ発表 4回目

第8回 グループ発表 5回目

第9回 グループ発表 6回目

第10回 グループ発表 7回目

第11回 グループ発表 8回目

第12回 グループ発表 9回目

第13回 グループ発表 10回目

第14回 グループ発表 11回目

第15回 授業のまとめと問題点の整理

## ●評価方法

評価は、毎回の演習におけるディスカッションへの貢献度と与えられた課題への取り組み方(50%)、さらに学期末のレポートによって(50%)評価する。

## ●受講生へのコメント

受講生は、毎回の授業に参加して必要な報告を行うだけでなく、他の発表について積極的に意見を述べることが求められる。

## ●参考文献・教材

教科書:小田中章浩『記憶喪失とその表象』(和泉書院)。必要に応じて映像資料も用いる。

科目番号 3728	授業科目名: 表現・表象文化論演習 II	旧科目名: 表現文化演習 II	単位数 2単位
開講期 後水5	英文名: Seminar in Culture and Representation II	担当教員名: 小田中章浩教授海老根剛教授中川眞教授	標準 履修年次 2・3年

## ●科目の主題

アーツマネジメントとは、芸術と社会をつなぎ、アーティストと一般の人々のあいだの出会いと協働を組織する仕事です。この演習では、講義、ワークショップ、実習を交えて、アーツマネジメントの基礎を学びます。

## ●到達目標

アーツマネジメントの基礎的な理論を学んだうえで、展覧会や講演会などの企画立案を行い、実際にその企画の実現を通して、アーツマネジメントに現在求められている課題とそれにふさわしい手法を学びます。

## ●授業内容・授業計画

開講形式が通常の講義や演習とは大幅に異なるので注意すること。最初のガイダンスに続いて、アーツマネジメントに関する導入的な講義を行い、その後はグループに分かれての実習となる。実習における実際の作業は、授業時間外に行われ、授業ではプロジェクトの進捗状況の報告と問題点の討議が行われる。

この授業は後期に開講されるが、前期のうちに説明会を行い、スケジュールとグループ分けを行うので、掲示に注意し、受講希望者はかならずこの説明会に参加するようにしてください。また、授業は一部、不定期に行われることとなりますが、この点についても説明会で説明します。また、最終的な企画の実施は授業期間の終了後(2月後半や3月など)になることも考えられます。受講者はその点を了解の上で受講してください。

以下に15回の授業計画を掲げるが、これはあくまでも仮のものであり、実際には複数の作業が同時進行することになるので、その点に留意するように。

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 講義アーツマネジメントとは何か(1)
- 第3回 講義アーツマネジメントとは何か(2)
- 第4回 企画立案(1)
- 第5回 企画立案(2)
- 第6回 予算と実施体制の決定
- 第7回 実施時期と会場の決定
- 第8回 ゲストとの交渉
- 第9回 中間総括
- 第10回 広報(1)ウェブサイト、フライヤー作成
- 第11回 広報(2)メディアへの周知
- 第12回 実施要領の詳細と役割分担の決定
- 第13回 作品の搬入と管理
- 第14回 企画実施
- 第15回 まとめ

#### ●評価方法

展覧会などのプロジェクトを企画立案・実施するワーキンググループへの参加度および最終的なプロジェクトの成果にもとづいて成績評価を行う。

#### ●受講生へのコメント

この授業は、通常の「座学」の授業とは正反対のコンセプトにもとづいて実施されます。他人から教えてもらうのを受動的に待つのではなく、みずから動くことを通して学習する能動的な態度が、受講者には要求されます。企画を実際に実現するための作業の大半は、授業時間外に行われます。型破りな授業ですので、ラクではありませんが、アーツマネジメント(広くは文化を社会に届ける仕事)に関心のある学生には、やりがいのある授業になるはずです。やる気のある学生の積極的な参加を期待します。

#### ●参考文献・教材

適宜紹介する。

科目番号 3729	授業科目名: <b>表現・表象文化論演習Ⅲ</b>	旧科目名: 表現文化演習Ⅲ	単位数 2単位
開講期 後火4	英文名: Seminar in Culture and Representation Ⅲ	担当教員名: 高島 葉子 准教授	標準 履修年次 3・4年

#### ●科目の主題

「赤ずきん」は「シンデレラ」や「白雪姫」同様に外国民話の代表である。最も有名な「赤ずきん」はグリム童話のものだが、それに先立つペロー版をはじめ、ヨーロッパだけでなくアジアにも様々な異話が分布している。さらに、再話やパロディの題材となり、新たな「赤ずきん」が創作され続けている。また、その解釈、アプローチの方法も多様である。本講義では、「赤ずきん」の変遷とその解釈のための多様なアプローチを学ぶ。

#### ●到達目標

様々に変遷する「赤ずきん」の考察を通して、民族、時代、社会と物語の関係についての理解を深め、物語研究のための分析力を身につけることを目標とする。

#### ●授業内容・授業計画

まず、「赤ずきん」のペロー版、グリム版を含む複数の異話テキストを読む。その後、「赤ずきん」に関する代表的な研究論文について担当者がレジュメを作成して内容を報告する。学期後半には「赤ずきん」のパロディ版に関して各自が研究発表を行い、学期末にレポートにまとめる。

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 「赤ずきん」の代表的テキストの講読(1)
- 第3回 「赤ずきん」の代表的テキストの講読(2)
- 第4回 「赤ずきん」に関する研究論文の報告(1)



- 第5回 「赤ずきん」に関する研究論文の報告(2)
- 第6回 「赤ずきん」に関する研究論文の報告(3)
- 第7回 「赤ずきん」に関する研究論文の報告(4)
- 第8回 「赤ずきん」に関する研究論文の報告(5)
- 第9回 「赤ずきん」の再話、パロディ版に関する文献の講読(1)
- 第10回 「赤ずきん」の再話、パロディ版に関する文献講読(2)
- 第11回 「赤ずきん」の再話、パロディ版に関する文献講読(3)
- 第12回 受講生の分析発表(1)
- 第13回 受講生の分析発表(2)
- 第14回 受講生の分析発表(3)
- 第15回 まとめ

●**評価方法**

平常点 50%、期末レポート 50%で評価する。

●**受講生へのコメント**

受講生は、毎回の授業に参加して必要な報告を行うだけでなく、他の発表について積極的に意見を述べることが求められる。

●**参考文献・教材**

授業中にプリントを配布する。また必要に応じて参考資料、文献を紹介する。

科目番号 3730	授業科目名: <b>表現・表象文化論演習IV</b>	旧科目名: 表現文化演習IV	単位数 2単位
開講期 前金2	英文名: Seminar in Culture and Representation IV	担当教員名: 石川 優 非常勤講師	標準 履修年次 3・4年

●**科目の主題**

現代における「創作」の諸相

●**到達目標**

- (1) 現代の多様な文化実践を研究するための批判的視点・方法論を習得する。
- (2) 「二次創作」研究および隣接する研究分野に関する専門的知識を身につける。

●**授業内容・授業計画**

この授業では、広義における「二次創作」的な文化実践をとりあげ、現代の「創作(創作行為・創作物)」のあり方について受講生とともに考える。「二次創作」とは、一般に「既存の作品(マンガ、アニメ、ゲーム、映画、音楽、TVドラマ、小説等)の設定やキャラクターなどを流用してつくられる表現」を意味する。同人誌やボーカロイドを用いた自主制作に代表されるように、「二次的」に「創作すること」が日常にあふれている現代において、「創作」はいかなる意味をもつのかを議論する。

まず、「二次創作」に関する概説を講義形式でおこなう。次に、受講生に配布テキストの論点をまとめて発表してもらい、全員でディスカッションをおこなう。授業では、キャラクター論、二次創作に関する諸理論、やおい/BL(ボーイズラブ)研究、ファン文化研究などの論考をとりあげる。なお、以下の授業計画は暫定的なものであり、実際の順序は変更される場合がある。

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 「二次創作」に関する概説(1)歴史
- 第3回 「二次創作」に関する概説(2)理論1
- 第4回 「二次創作」に関する概説(3)理論2、作品分析
- 第5回 発表および討論(1)
- 第6回 発表および討論(2)
- 第7回 発表および討論(3)
- 第8回 発表および討論(4)
- 第9回 中間総括
- 第10回 発表および討論(5)
- 第11回 発表および討論(6)
- 第12回 発表および討論(7)
- 第13回 発表および討論(8)
- 第14回 発表および討論(9)
- 第15回 全体総括

●**評価方法**

出席(10%)、授業での発表(40%)、学期末レポート(50%)によって評価する。

●**受講生へのコメント**

受講生の発表と討論が中心となるため、積極的な授業への参加を期待する。初回にて具体的な授業スケジュールの説明、文献リストの配布をおこなうので、必ず出席すること。

●**参考文献・教材**

授業中に指示する。

科目番号 3731	授業科目名: <b>比較表現論演習</b>	旧科目名: 表現文化演習V	単位数 2単位
開講期 前水2	英文名: Seminar in Comparative Representation	担当教員名: 野末 紀之 教授	標準 履修年次 3・4年

●**科目の主題**

レオナルド・ダヴィンチの「モナリザ」は、いつから「謎めいた微笑み」をあらわすようになったのか。文学者や美術批評家、歴史家による解釈の歴史をたどる。

●**到達目標**

現在において自明とされていることを歴史的な視点から相対化するとともに、言語と表象の関係について研究する方法を学ぶ。

●**授業内容・授業計画**

テキスト(英文)を演習形式で読みすすめていく。受講生は担当する箇所を要約し、かつ配布されるサブテキストを綿密に読解することが求められる。

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 テキスト Chapter1 前半
- 第3回 テキスト Chapter1 後半
- 第4回 テキスト Chapter2 前半
- 第5回 テキスト Chapter2 後半
- 第6回 テキスト Chapter3 前半
- 第7回 テキスト Chapter3 後半
- 第8回 テキスト Chapter4 前半
- 第9回 テキスト Chapter4 後半
- 第10回 テキスト Chapter5 前半
- 第11回 テキスト Chapter5 後半
- 第12回 テキスト Chapter6 前半
- 第13回 テキスト Chapter6 後半
- 第14回 まとめ
- 第15回 試験

●**評価方法**

出席、発表、試験を総合的に評価する。

●**受講生へのコメント**

授業への積極的な参加と徹底した予習が必要である。

●**参考文献・教材**

プリント配布。Donald Sassoon, *Becoming Mona Liza* ほか。

科目番号 3732a	授業科目名: <b>文化理論特別演習 a</b>	旧科目名: 表現文化演習VIa	単位数 2単位
開講期 後火2	英文名:	担当教員名: 小田中 章浩 教授	標準 履修年次 3・4年

●**科目の主題**

卒業論文作成のための研究テーマの設定と研究計画書の作成

●**到達目標**

本講は表現文化学コースに所属する三回生(四回生)を対象とし、表現文化学コースにおいて卒業論文を書くための研究テーマ設定の方法、問題の論理的な構築ならびに分析の方法について指導し、さらにそれらのプレゼ

ンテーション能力を高めることを目的とする。したがって表現文化学コースに所属する三回生(四回生)は、この演習を必ず受講することが求められる。

●**授業内容・授業計画**

受講者がこれまでに大学で学んできた論理的な文章表現力を確認するために、まず文章の要約、小論文作成のためのアウトラインの作成、さらに 800 字のおよび 1600 字の小論文の作成へと段階的に課題を与える。その過程において表現文化学に関係した文献を読み、また文献の引用の方法についても教える。最後に英語で与えられた課題についてグループで英語によるプレゼンテーションと質疑応答の練習を行う。

- 第 1 回 文章を要約する:「使用後を考えなかった兵器」を元に要約の具体的方法を解説
- 第 2 回 文章を要約する:『民族という名の宗教』の要約法について考える
- 第 3 回 文章を要約する:『動物化するポストモダン』の要約法について考える
- 第 4 回 引用の方法:論文執筆における引用の方法について解説する
- 第 5 回 文章を要約する:『「七人の侍」と現代』の約法について考える
- 第 6 回 分析の方法:三つのテキストのキーワードを用いて自分に関心のある対象を分析してみる
- 第 7 回 分析のアウトラインを作る:800 字の小論文のためのアウトライン作成
- 第 8 回 分析のアウトラインを作る:1600 字の小論文を書くためのアウトラインの作成
- 第 9 回 小論文の作成:1600 字の小論文を完成させる
- 第 10 回 英語でのプレゼン:英語でのプレゼン構想の検討
- 第 11 回 英語でのプレゼン:英語プレゼンスクリプトの検討
- 第 12 回 英語でのプレゼン:英語プレゼン練習 1 回目
- 第 13 回 英語でのプレゼン:英語プレゼン練習 2 回目
- 第 14 回 英語でのプレゼン:英語プレゼン本番ならびに卒論計画書の検討
- 第 15 回 卒論計画書の作成

●**評価方法**

受講生はほぼ毎回課題の提出が求められる。評価は、各自の毎回の課題への取り組み(70%)と、講義終了後に提出する卒論計画書(30%)によって行う。

●**受講生へのコメント**

この a クラスは、表現文化学コース所属の三回生のうち、学生番号で数えて最初の半数が受講することを想定している。ただしやむを得ない事情により a クラスを受講できない者については、b クラスへの移動を認めるので、最初の授業の際に教員に相談すること。

●**参考文献・教材**

なだいなだ『民族という名の宗教』岩波新書(新赤版)204,1992  
 東浩紀『動物化するポストモダン』講談社現代新書 1575,2001  
 四方田犬彦『「七人の侍」と現代』岩波新書(新赤版)1255,2010  
 さらに黒沢明監督『七人の侍』をまだ見ていない人は、この副読本が用いられる時までに見ておくこと。

科目番号 3732b	授業科目名: <b>文化理論特別演習 b</b>	旧科目名: 表現文化演習 VIb	単位数 2 単位
開講期 後木 3	英文名:	担当教員名: 小田中 章浩 教授	標準 履修年次 3・4 年

●**科目の主題**

卒業論文作成のための研究テーマの設定と研究計画書の作成

●**到達目標**

本講は表現文化学コースに所属する三回生(四回生)を対象とし、表現文化学コースにおいて卒業論文を書くための研究テーマ設定の方法、問題の論理的な構築ならびに分析の方法について指導し、さらにそれらのプレゼンテーション能力を高めることを目的とする。したがって表現文化学コースに所属する三回生(四回生)は、この演習を必ず受講することが求められる。

●**授業内容・授業計画**

受講者がこれまでに大学で学んできた論理的な文章表現力を確認するために、まず文章の要約、小論文作成のためのアウトラインの作成、さらに 800 字のおよび 1600 字の小論文の作成へと段階的に課題を与える。その過程において表現文化学に関係した文献を読み、また文献の引用の方法についても教える。最後に英語で与えられた課題について、グループで英語によるプレゼンテーションと質疑応答の練習を行う。

- 第 1 回 文章を要約する:「使用後を考えなかった兵器」を元に要約の具体的方法を解説
- 第 2 回 文章を要約する:『民族という名の宗教』の要約法について考える

- 第 3 回 文章を要約する:『動物化するポストモダン』の要約法について考える
- 第 4 回 引用の方法:論文執筆における引用の方法について解説する
- 第 5 回 文章を要約する:『「七人の侍」と現代』の要約法について考える
- 第 6 回 分析の方法:三つのテキストのキーワードを用いて自分に関心のある対象を分析してみる
- 第 7 回 分析のアウトラインを作る:800 字の小論文のためのアウトライン作成
- 第 8 回 分析のアウトラインを作る:1600 字の小論文を書くためのアウトラインの作成
- 第 9 回 小論文の作成:1600 字の小論文を完成させる
- 第 10 回 英語でのプレゼン:英語でのプレゼン構想の検討
- 第 11 回 英語でのプレゼン:英語プレゼンスクリプトの検討
- 第 12 回 英語でのプレゼン:英語プレゼン練習 1 回目
- 第 13 回 英語でのプレゼン:英語プレゼン練習 2 回目
- 第 14 回 英語でのプレゼン:英語プレゼン本番ならびに卒論計画書の検討
- 第 15 回 卒論計画書の作成

●**評価方法**

受講生はほぼ毎回課題の提出が求められる。評価は、各自の毎回の課題への取り組み(70%)と、講義終了後に提出する小論文(30%)によって行う

●**受講生へのコメント**

このbクラスは、表現文化学コース所属の三回生のうち、学生番号で数えて最初の半数が受講することを想定している。ただしやむを得ない事情によりbクラスを受講できない者については、aクラスへの移動を認めるので、最初の授業の際に教員に相談すること。

●**参考文献・教材**

なだいなだ『民族という名の宗教』岩波新書(新赤版)204,1992

東浩紀『動物化するポストモダン』講談社現代新書 1575,2001

四方田犬彦『「七人の侍」と現代』岩波新書(新赤版)1255,2010

さらに黒沢明監督『七人の侍』をまだ見ていない人は、この副読本が用いられる時までに見ておくこと

科目番号 3733	授業科目名: <b>表現文化論特論</b>	旧科目名: 表現文化特論 I	単位数 2 単位
開講期 後火 3	英文名: Specific Lecture in Art and Representation	担当教員名: 増田 聡 准教授	標準 履修年次 3・4 年

●**科目の主題**

映画や絵画のように距離をもって鑑賞される「芸術」というより、衣服のごとく身にまとう「もの」へと接近しつつある 21 世紀初頭のポピュラー音楽環境を、複製技術、主体性の変容、盗作と所有権意識等の観点から検討する。

●**到達目標**

音楽文化研究への学術的アプローチに必要な「音楽の捉え方」を獲得することを目標とする。

●**授業内容・授業計画**

講義形式。授業計画は仮のものであり、履修者の背景や知見に応じて適宜変更する。また視聴覚資料を多用する。

- 第 1 回 イントロダクション
- 第 2 回 ウォークマンと聴衆の欲望
- 第 3 回 ブランドとしてのアーティスト
- 第 4 回 音楽的主体の複数性
- 第 5 回 演奏リアリズム概念とその相対化の動向
- 第 6 回 Perfume と初音ミクの相違
- 第 7 回 ビデオクリップ史(1)
- 第 8 回 ビデオクリップ史(2)
- 第 9 回 ビデオクリップ史(3)
- 第 10 回 パクリと盗作
- 第 11 回 copyright と著作権
- 第 12 回 複製と再生産
- 第 13 回 ディスク文化の諸相
- 第 14 回 芸術と物
- 第 15 回 まとめ

## ●評価方法

期末レポートによる評価

## ●受講生へのコメント

楽典の知識は必要としないが、現代文化や文化理論について広く関心を持つ学生の履修を期待する。

## ●参考文献・教材

参考文献として下記をあげておく。音楽分野について卒論執筆を考えている受講生は一読しておくこと。

増田聡『その音楽の〈作者〉とは誰かーリミックス・産業・著作権』(みすず書房)

増田聡『聴衆をつくるー音楽批評の解体文法』(青土社)

増田聡・谷口文和『音楽未来形ーデジタル時代の音楽文化のゆくえ』(洋泉社)

科目番号 3734	授業科目名: <b>表象文化論特論</b>	旧科目名: 表現文化特論Ⅱ	単位数 2単位
開講期 前集中	英文名: Specific Lecture in Culture and Representation	担当教員名: 橋本 一径 非常勤講師	標準 履修年次 3・4年

## ●科目の主題

西洋近現代美術(主に 20 世紀美術)の諸相を、年代順に追うのではなく、鍵となる概念(抽象、コラージュ、総合芸術作品、偶然、複製とアウラ…)を通して浮かび上がらせます。

## ●到達目標

西洋近現代美術の基礎的な概念と批評言語をおさえ、その歴史的な文脈(コンテキスト)を理解します。

## ●授業内容・授業計画

基本的には、西洋近現代美術についてテーマ別に論じますが、本学で西洋近現代美術の通史の講義を受ける機会がないことを考慮して、最初に簡単に通史を概観する準備段階を設けます。

- 第 1 回 [イントロダクション]近代以前の美学
- 第 2 回 [準備段階]20 世紀美術の通史的概観
- 第 3 回 モダニズムと平面性
- 第 4 回 抽象美術の誕生
- 第 5 回 戦後抽象美術の諸問題
- 第 6 回 コラージュとは何か
- 第 7 回 パウル・クレーの「切断(分割)コラージュ」
- 第 8 回 偶然の戦略
- 第 9 回 言語としての芸術
- 第 10 回 イメージと文字
- 第 11 回 「総合芸術作品」の理念
- 第 12 回 クルト・シュヴィッターズとメルツバウ
- 第 13 回 アッサンブラージュと空間の拡張
- 第 14 回 プリミティヴ:西洋美術の「他者」
- 第 15 回 複製とアウラ

## ●評価方法

授業中に扱った内容から興味のあるテーマを選び、必ず具体的な作品分析を踏まえたレポートを提出すること。註・参考文献を明記し、インターネットのサイトからの文章のダウンロードは不可。図版・キャプションも付けること。レポート(80%)、出席点(20%)。

## ●受講生へのコメント

講義は、講師が作成したプリントを基に、パワーポイントで提示する作品の画像に解説を加えながら進めます。講義中に見せた画像をプリントアウトしたものは配布しないので注意すること。

高階秀爾監修『カラー版西洋美術史』の該当する部分や、高階秀爾『近代絵画史(上・下)』(特に下巻)をあらかじめ読んで、通史の大まかな流れを理解しておくこと、テーマ別の講義を一層理解しやすくなります。講義の後、受講者が各自興味を持ったテーマについて、指示された参考文献等を読んで調べることが望ましいです。

なお、集中講義は、9 月末開講予定です。

## ●参考文献・教材

参考文献『世界美術大全集西洋編』小学館、1992～1997 年。

E.H.ゴンブリッチ『美術の物語』ファイドン、2007 年。

高階秀爾監修『カラー版西洋美術史』美術出版社、2002 年。

高階秀爾『近代絵画史(上・下)』中公新書、1975 年。

天野知香『装飾／芸術—19-20世紀のフランスにおける「芸術」の位相』ブリュッケ、2001年。  
 河本真理『切断の時代—20世紀におけるコラージュの美学と歴史』ブリュッケ、2007年。  
 河本真理『葛藤する形態—第一次世界大戦と美術』人文書院、2011年3月刊行予定。  
 詳しい参考文献は、授業中に適宜指示します。

科目番号 3735	授業科目名： <b>比較表現論特論</b>	旧科目名： ロシア文化論	単位数 2単位	
開講期 後月4	英文名： Specific Lecture in Comparative Representation	担当教員名： 浅岡 宣彦 特任教員	標準 履修年次 1～4年	

● **科目の主題**

主題：文学と文学を素材とする他の芸術ジャンルとの比較を通して作品の鑑賞力を養う。

● **到達目標**

目標：豊饒なロシア文化の精華を鑑賞しつつ、芸術文化の多様な表現方法を理解してもらう。

● **授業内容・授業計画**

授業内容：文学作品とそれを素材に用いた他の芸術ジャンル(音楽、美術、演劇、映画等)の作品を取り上げ、表現方法や解釈の相違などを比較検討する。それと同時に、いくつかの重要な事項(逆遠近法、視点、異化、モンタージュなど)を具体的に取り上げる。

- 第1回 文学と音楽(1)
- 第2回 文学と音楽(2)
- 第3回 文学と音楽(3)
- 第4回 文学と音楽(4)
- 第5回 文学と音楽(5)
- 第6回 文学と美術(1)
- 第7回 文学と美術(2)
- 第8回 文学と演劇(1)
- 第9回 文学と演劇(2)
- 第10回 文学と演劇(3)
- 第11回 文学と映画(1)
- 第12回 文学と映画(2)
- 第13回 文学と映画(3)
- 第14回 文学と映画(4)
- 第15回 補講またはテスト

● **評価方法**

具体的に作品を複数読んでもらい、いくつかのテーマに沿ってレポートおよびテストで論じてもらう。出席とコミュニケーション・カードの記述を考慮し、レポートとテストで評価をする。

● **受講生へのコメント**

主として、ロシア文学の代表的作品とそれを素材にした様々な芸術作品を取り上げるので、必ず複数の作品を読み、鑑賞すること。

● **参考文献・教材**

適宜、プリントを配布する。

参考文献：藤沼貴、小野理子、安岡治子共著『ロシア文学案内』岩波文庫。  
 ボリス・ウスペンスキイ著『構成の詩学』(川崎暎・大石雅彦訳)法政大学出版局。  
 ポルドミンスキイ著『ロシア絵画の旅』(尾家順子訳)群像社。  
 ユーリイ・ロトマン著『映画の記号論』(大石雅彦訳)平凡社。  
 ロートマン著『ロシア貴族』(桑野隆ほか訳)筑摩書房。  
 そのほかの文献は適宜、授業中に指示する。

科目番号 3716	授業科目名： <b>表現文化講読 I</b>	旧科目名：	単位数 2単位	
開講期 後月3	英文名： Readings in Art and Representation I	担当教員名： 野末 紀之 教授	標準 履修年次 2～4年	

● **科目の主題**

イギリス 19 世紀末は、中産階級の結婚生活を批判し女のセクシュアリティを大胆率直に描く女性作家たちを輩出した。なかでも有名なのは、ビアズリーのイラストつきの *Keynotes*(1893)で成功を収めたジョージ・エジャートン (George Egerton) である。このなかの短篇「交差線」('A Cross Line')とそれにたいするパロディ作品 ('She-Notes')を中心に精読する。余裕があれば、他の作家の作品も取上げたい。

●到達目標

精緻な言語表現と斬新な形式を読み解く面白さを味わうとともに、それを分析へとつなげる方法のヒントを得るのが目標である。

●授業内容・授業計画

テキストを演習形式で読みすすめる。質問をふくめ、積極的な発言が求められる。

- 第 1 回 イントロダクション
- 第 2 回 テキスト①1 ページ～テキスト①3 ページ
- 第 3 回 テキスト①4 ページ～テキスト①6 ページ
- 第 4 回 テキスト①7 ページ～テキスト①9 ページ
- 第 5 回 テキスト①10 ページ～テキスト①11 ページ
- 第 6 回 テキスト①12 ページ～テキスト①14 ページ
- 第 7 回 テキスト①15 ページ～テキスト①17 ページ
- 第 8 回 テキスト①18 ページ～テキスト①20 ページ
- 第 9 回 テキスト①21 ページ～テキスト①22 ページ
- 第 10 回 テキスト②1 ページ～テキスト②2 ページ
- 第 11 回 テキスト②3 ページ～テキスト②4 ページ
- 第 12 回 テキスト①と②の対比およびまとめ
- 第 13 回 資料と論文を読む①
- 第 14 回 資料と論文を読む②
- 第 15 回 試験

●評価方法

出席、発表、試験を総合的に判断する。

●受講生へのコメント

辞書を徹底的に引いて、英文を読み込むこと。

●参考文献・教材

テキストはプリントを配布する。参考文献は授業中に指示する。

科目番号 3737	授業科目名: 表現文化講読Ⅱ	旧科目名: 表現文化講読Ⅱa	単位数 2単位	
開講期 後木 4	英文名: Reading In Art and Representation Ⅱ	担当教員名: 三上 雅子 教授	標準 履修年次 2～4年	

●科目の主題

現代の文化的事象を取り上げたドイツ語テキストを取り扱う。言語テキストのみではなくドイツ語圏の文化・芸術を扱った非言語テキストをも対象とする。

●到達目標

ドイツ語読解力を養成するとともに、現代文化研究・比較文化研究に必要な総合的知見をも習得させる。

●授業内容・授業計画

映画におけるドイツ語を取り上げる。DVDによって映画を鑑賞するとともに、ドイツ語によるシナリオあるいは映画評論を読む。また授業においては、ドイツ映画史についても講じる。受講生にはドイツ語テキストを分担・訳読してもらう。

- 第 1 回 イントロダクション、アイスブレーキング。
- 第 2 回 ドイツ映画史について講じる(1)。
- 第 3 回 ドイツ映画史について講じる(2)。
- 第 4 回 第二次世界大戦前に制作されたドイツ映画を鑑賞する。
- 第 5 回 テキスト訳読第 1 回。
- 第 6 回 テキスト訳読第 2 回。
- 第 7 回 テキスト訳読第 3 回。
- 第 8 回 ニュージャーマンシネマを鑑賞する。
- 第 9 回 テキスト訳読第 4 回。

- 第 10 回 テキスト訳読第 5 回。
- 第 11 回 テキスト訳読第 6 回。
- 第 12 回 テキスト訳読第 7 回。
- 第 13 回 1990 年代～2000 年代のドイツ映画を鑑賞する。
- 第 14 回 テキスト訳読第 8 回。
- 第 15 回 レポート作成にあたっての注意、全体総括。

●**評価方法**

授業中の発表 40%、レポート 60%。

●**受講生へのコメント**

授業で取り上げる映画のみではなく、DVD などでもなるべく多くのドイツ映画を見ておいてほしい。また授業中の討論などにおける積極的参加が望まれる。

●**参考文献・教材**

適宜指示する。

科目番号 3738	授業科目名： <b>表現文化講読Ⅲ</b>	旧科目名： 表現文化講読Ⅱb	単位数 2 単位
開講期 前火 2	英文名： Reading In Art and Representation Ⅲ	担当教員名： 小田中 章浩 教授	標準 履修年次 2～4 年

●**科目の主題**

本講は、初級レベルのフランス語を学んだ学生を対象として、表現文化に関連したフランス語の教材を用いることによって、中級フランス語の読解力を習得してもらうことを目的とする。

●**到達目標**

上記のように、中級フランス語の読解力を習得してもらうことを目標とする。

●**授業内容・授業計画**

教材は前年度に引き続き、Riyoko Ikeda ,*La Rose de Versailles* (池田理代子『ベルサイユのばら』)を読む。ただし受講者の希望により、他のマンガ、あるいは映画、ファッション等の雑誌の記事など、中級レベルのフランス語の習得に役立つ他の表現文化関連の題材を扱うこともある。

- 第 1 回 仏語テキスト購読 1 回目
- 第 2 回 仏語テキスト購読 2 回目
- 第 3 回 仏語テキスト購読 3 回目
- 第 4 回 仏語テキスト購読 4 回目
- 第 5 回 仏語テキスト購読 5 回目
- 第 6 回 仏語テキスト購読 6 回目
- 第 7 回 仏語テキスト購読 7 回目
- 第 8 回 仏語テキスト購読 8 回目
- 第 9 回 仏語テキスト購読 9 回目
- 第 10 回 仏語テキスト購読 10 回目
- 第 11 回 仏語テキスト購読 11 回目
- 第 12 回 仏語テキスト購読 12 回目
- 第 13 回 仏語テキスト購読 13 回目
- 第 14 回 仏語テキスト購読 14 回目
- 第 15 回 仏語テキスト購読 15 回目

●**評価方法**

評価は平常点 (50%) と期末試験 (50%) によって行う。

●**受講生へのコメント**

受講生は初級レベルのフランス語力を身につけていることが求められる。

●**参考文献・教材**

授業において随時プリントとして配布する。